

靈樞義 四時氣第十九

張志聰曰、此篇、四時の氣の皮膚經絡、皮肉筋骨、及び六府の外合に入ると論ず。故に互病の起るや、因、外の皮膚、脈肉、筋骨に在りて、内の六府に及ぶ者有りといふ。病ふや、六府の氣、外合の形層に及ぶ者有り。内因外因、皆是なり。所有れば、其の氣の出入を知らば、則ち治する所以を知らべしと。

一曰病の起るも

○黃帝岐伯に問ふて曰く、夫れ四時の氣とは形同いはらざるも、皆ほする所を有る。交刺の道は何を以てか、余めと爲さん。一本は實に作ぬ

(何ぞ)

不素<sup>は</sup>廿三<sup>は</sup>難刺、甲之經は五<sup>は</sup>鍼交刺<sup>は</sup>意上。

甲之經は定を實に作り、不素は實とすのまかに作り、原註は字に作り、固本は爲に作り

楊上善曰く、一は則ち、四氣の不同、二は則ち、病を正すに因有りりと  
灸刺は、（原因）之を扱すべく要ものと云ふも、何と云ふに貴しと爲す也。  
善字するに、定、形、生と韻し、寶と道と韻す。

○岐伯答へて曰く、四時之氣は各々在る所を有す、灸刺の道は、氣穴  
を得て定めと爲す。

原本は刺と別と誤り。各本も同じ。今は原本に依り、穿記と正す。  
甲之經は得字喪し。

太素は定を寶に作す甲之經も同じ。

書同の考すか

楊上善曰く、灸刺の貴ぶ所は、四時之氣より得子を以てする也。  
張介賓曰く、時々の氣の在る所は、即ち氣穴也。

○故に善は經の血脈、分肉の間にあり、甚しき者深く之を刺し、間  
あり存は淺く之を刺す。

- ・甲乙經は血と髓に作也
- ・太素は淺利を淺取に作也
- ・靈・本輸篇に云う、春は絡脈、滌滌、分肉の間に取れ。甚しきは深く之を取り、間あり不ぬは淺く之を取也
- ・楊上善曰く「春時、人の氣、脈に在るとは、經路の脈、分肉の間に在ると謂ふ。故に春は經の血脈、分肉の間に取也」
- ・張介賓曰く「春は經を取るとは、本輸篇の（所謂大經、分肉の間に取也）」
- ・馬蒔曰く「經は當に絡に作すべし。春は、絡穴の血脈、分肉の間に取るとは、平の太陰、少陰、經の列缺を絡の類と爲す如くす。當にこの病の輕重を視て、刺の淺深と爲すべし。素水熱穴論には、春は、絡脈、分肉を取れと云ふ」

絡脈—素刺腰痛論には、脈、穴

○夏は、盛經の疎絡を取り、分肉を取れ。皮膚を絶て。



感經とは、  
感經とは、

・甲乙經は孫字意。

・揚上善曰く「夏時は人氣、經に滿ち、氣溢ふ孫絡は血を受け、

皮膚も充實す。故に夏は感經の孫絡を取り、又、分脈を取り

以て皮膚を絶つ也」

・馬蒔曰く「平の陽明大腸經の陽谿と經の類とを爲す如くす。

孫絡とは即ち脈度篇に謂ふ所の「支」と稱ひはる者と終と

を爲し、終の別は孫と爲すなり。素水熱穴論には「夏は感經

の分脈を取り」と云ふ。又曰く「膚を絶り、皮を去るは、邪の居る

淺いゆへ也」蓋し「夏氣は表に在り」と言ふが故に、病も表に在り、

皮膚を絶つに止めて、深入せざと刺す、正に邪の居る所を以て

甚い淺いと爲せばなり」又曰く「いはゆる感經とは陽經に水は、

則ち手足の六陽經の經穴を取りに止むる耳」

・素問篇に云ふ「夏は諸輸、孫絡、肌肉、皮膚の上を取れ」と。

○秋は經の輸を取り、邪は筋に在るは、之を合に取る。

・甲之經は邪の下に氣字有り。合の上に於け有り。  
 ・本輸爲にまふ、「秋は滯合を取れ、餘りは春決の如くせよ」と。  
 ・楊上善曰く、「秋は天氣、收まりおめ、腠理は閉塞し、皮膚  
 も引急す。以に秋は藏經相の輸を取れ、以て陰邪を寫す。  
 は

介は經の合を取れ、陽邪を寫す也」  
 馬蒔曰く、「秋は各經の俞穴を取るとは、手の太陰肺經の大俞の  
 類の如くす。水熱穴論にまふ、「俞を取れ、以て陰邪を寫す」とは  
 則ち是れ六陰經の俞なりと知れ。若し命にたれば、六陽穴の合穴  
 を取り、手の陽明大腸經の曲池を合の類と爲す如くす。  
 水熱穴論にまふ、「合を取て、以て陽邪を寫す」とは則ち是の六陽經の  
 合穴なりと知るべし。  
 是處

○冬は井榮を取れ、必ず深く之を留めよ



趙本、兩吳本は井を井と誤る古抄本、兩吳本は榮水と榮に作る  
本輸篇に「今ほ諸井諸輸の分を取り、深く之を留めんと欲す」と  
云ふ。

楊上善曰く、「冬時は蓋し藏血の氣中に在り、内の骨體に  
著き、五藏に通ずるが以に、井を取りて陰氣を下し、(の場合)は、  
榮を取りて陽氣を實すればなり」

馬蒔曰く、「水熱穴論に井を取りて陰逆を寫せ、と云ふは、則ち  
陰經は當に刺し、手の太陰肺經の穴高を井の類と爲す如く  
すべし。井穴を 榮水を取って陽氣を實するとは、則ち、陽經は  
當に榮水穴を刺し、手の陽明太陽經の二間を榮の類と爲す如  
くすべし。各氣は深く入れば、必ず深刺と、久しく之を留めらる  
べし」